

解剖学 I

担当教員 浅井 福太郎

配当年次 1年

開講時期 第1学期

単位区分 必修

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

人体の正常な構造を学び、イメージできるようになることを目的とする。本講座では人体の構成単位である細胞・組織の微細構造を理解でき、さらに鍼灸の臨床にとって最も大事な体表解剖の指標となる運動器（骨格・筋肉）の構造と機能について骨標本・模型を用いて理解できるようになる。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	解剖学用語の理解、骨について（構造、発生と成長、連結）
2	骨格全体の概要、関節について
3	脊柱・椎骨の構造と機能について
4	頭蓋骨の構造と機能について
5	胸郭の骨の構造と機能について
6	骨盤の骨の構造と機能について
7	上肢の骨の構造と機能について
8	下肢の骨の構造と機能について
9	筋肉について、筋肉全体の概要
10	顔面・頸部の筋の起始・停止・作用・支配神経について
11	上肢の筋の起始・停止・作用・支配神経について
12	下肢の筋の起始・停止・作用・支配神経について
13	臀部の筋の起始・停止・作用・支配神経について
14	背部（肩甲帯）の筋の起始・停止・作用・支配神経について
15	腹部の筋の起始・停止・作用・支配神経について

【履修上の注意事項】

予習として予告した内容を教科書を読み十分に把握しておくこと。
 復習として授業内容中の指示された図をスケッチすること。

【評価方法】

期末試験（80%）、および小テスト（20%）による総合評価

【テキスト】

『解剖学 第2版』河野邦雄、伊藤隆造著（医歯薬出版）

『解剖学マスター』影山 照雄（医道の日本社）

【参考文献】

分担 解剖学アトラス 平田幸男（文光堂）

解剖学Ⅱ

担当教員 野口 恭庸

配当年次 1年

単位区分 必修

準備事項

備考

開講時期 第2学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

循環器系・神経系の解剖学的な特徴を十分に理解し、臨床系科目で学習する疾患・症候の理解に応用することができる。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	血液の基礎知識及び血管の種類・構造・機能について説明できる
2	上行大動脈及び頸胸部に分布する動脈について説明できる
3	腹部及び上下肢に分布する動脈について説明できる
4	全身の主要な静脈及びリンパ管系について説明できる
5	心臓の構造・機能について説明できる
6	神経系の系統発生的な特徴と基本構造が説明できる
7	脳・脊髄の髄膜及び血管系・脳室系の構造・機能が説明できる
8	脳の構成及び脊髄の形態学的特徴・機能が説明できる
9	大脳皮質の形態学的特徴、機能局在が説明できる
10	大脳基底核・辺縁系・間脳の形態学的特徴・機能が説明できる
11	脳幹の外観及び中脳の形態学的特徴・機能が説明できる
12	橋・小脳の形態学的特徴・機能が説明できる
13	延髄及び脳幹網様体、脳神経の構造・機能が説明できる
14	脳・脊髄の運動性神経路の形態学的特徴・機能が説明できる
15	脳・脊髄の感覚性神経路の形態学的特徴・機能が説明できる

【履修上の注意事項】

初めて見聞きする専門的かつ膨大な情報に対して、何も準備せずに聴講すると一切が理解できずに終わってしまう。したがって本科目では、毎回の講義の理解を助けるために用意した自習課題を前週に配布する。本講義を聴講する際は、必ずその課題を仕上げた上で出席すること。また出席登録において、時間を超過した登録については欠席とする場合があるので十分に注意すること。尚、詳細については講義開始前のオリエンテーション時に説明を行う。

【評価方法】

提出課題…50%、期末試験…50% 両者の合計により評価。

【テキスト】

『分冊 解剖学アトラスⅡ 内臓』（第6版）Helga Fritsch著・平田幸男訳、『分冊 解剖学アトラスⅢ 神経系と感覚器』（第6版）W. Kahle著・平田幸男訳、文光堂。

【参考文献】

『イラスト解剖学』（第8版）、松村譲児著、中外医学社。その他、適宜講義中に資料を配布する。

解剖学Ⅲ（講義・演習）

担当教員 未定

配当年次 2年

単位区分 必修

開講時期 第1学期

授業形態 講義・演習

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

解剖学Ⅲでは呼吸器系・消化器系・泌尿器系・感覚器系の構造と機能について理解、把握できる。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	呼吸器系の鼻腔・咽頭・口頭の機能と構造について説明できる
2	気管・気管支・肺の構造と機能について説明できる
3	消化管の基本構造と機能について説明できる
4	口腔・咽頭の構造と機能について説明できる
5	食道・胃・小腸・大腸の構造と機能について説明できる
6	肝臓・胆嚢・膵臓の構造と機能について説明できる
7	腎臓・胆嚢の構造と機能について説明できる
8	生殖器の構造と機能について説明できる
9	受精と発生の機序について説明できる
10	内分泌の働きと機能について説明できる
11	視覚器の構造と機能について説明できる
12	平衡・聴覚器の構造と機能について説明できる
13	味覚器の構造と機能について説明できる
14	嗅覚器の構造と機能について説明できる
15	体表解剖について総合的に説明できる

【履修上の注意事項】

予習として教科書で予告した内容を十分に把握しておくこと。
 復習として授業内容中の指示された図をスケッチすること。
 授業後オリジナル出席カードの備考欄に授業の内容および感想を必ず書くこと。

【評価方法】

レポート30%、自主的学習態度10%、小テスト60%による総合評価

【テキスト】

解剖学 第2版 河野邦雄 伊藤隆造著 医歯薬出版

【参考文献】

解剖学アトラス 越智淳三（文光堂）

生理学 I

担当教員 齋田 和孝

配当年次 1年

開講時期 第1学期

単位区分 必修

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

疾患の理解や治療の実践においては、正常な人体の機能（生理学）の正しい理解が必要不可欠である。生理学 I では、まず生理学の基礎として細胞機能および活動電位の仕組みを説明できるようになること、続いて、心機能と血液循環および呼吸に関する基礎理論を理解し、これらの正常状態を正しく説明できるようになることを目的とする。サブテキストを用いた小テストを通して、さらに理解を深める。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	細胞機能の基礎
2	血液：赤血球、ヘモグロビン、鉄代謝、血液型
3	血液：白血球、免疫
4	血液：血小板、血液凝固
5	呼吸：呼吸器系の構造、換気機能、呼吸力学 (小テスト)
6	呼吸：ガス交換、呼吸ガスの運搬
7	呼吸：呼吸運動の調節
8	酸塩基平衡
9	心臓：膜電流 (小テスト)
10	心臓：自律神経による調節
11	心臓：心電図、心臓の収縮
12	循環：血管の構造と機能、血行力学
13	循環：大循環、微小循環
14	循環：循環調節
15	循環：特殊部位の循環、リンパ循環 (小テスト)

【履修上の注意事項】

高校の生物および化学を復習しておくこと。受講前に教科書の該当項目を必ず読んでおくこと。授業後は自分でノートを整理して復習しておくこと。

【評価方法】

小テスト3回分を15点に換算、筆記試験85点、合計100点とし、60点以上を合格とする。欠席5回以上は単位を認定しない。再試験は筆記試験のみで評価する。

【テキスト】

1. 「生理学テキスト（第7版）」著：大地睦夫. 文光堂
2. 「生理学マスター」著：影山照雄. 医道の日本社

【参考文献】

1. 「標準生理学（第8版）」監修：小澤澗司、福田康一郎. 医学書院
2. 「ガイトン生理学 原著第11版」総監訳：御手洗玄洋. エルゼビア・ジャパン

生理学Ⅱ

担当教員 齋田 和孝

配当年次 1年

開講時期 第2学期

単位区分 必修

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

疾患の理解や治療の実践においては、正常な人体の機能（生理学）の正しい理解が必要不可欠である。生理学Ⅱでは、消化・吸収と代謝機能、腎機能と体液の調節、および筋と神経に関する生理機能の基本的な仕組みを説明できるようになることを目的とする。サブテキストを用いた小テストを通して、さらに理解を深める。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	消化と吸収：消化管の構造と神経支配
2	消化と吸収：消化管運動
3	消化と吸収：消化液の分泌
4	消化と吸収：栄養素の分解と吸収
5	栄養素の代謝、エネルギー代謝
6	腎機能：機能的構造、糸球体濾過 (小テスト)
7	腎機能：尿細管機能、尿の濃縮
8	腎機能：体液の調節、浸透圧、排尿機能
9	活動電位、イオンチャネル
10	骨格筋の収縮
11	シナプス伝達（神経筋接合部、中枢神経系のシナプス伝達） (小テスト)
12	運動系：脊髄、脳幹
13	運動系：小脳、大脳基底核
14	脳の統合機能：大脳皮質、大脳辺縁系
15	脳の統合機能：脳波、睡眠、学習、記憶 (小テスト)

【履修上の注意事項】

高校の生物および化学を復習しておくこと。受講前に教科書の該当項目を必ず読んでおくこと。授業後は自分でノートを整理して復習しておくこと。

【評価方法】

小テスト3回分を15点に換算、筆記試験85点、合計100点とし、60点以上を合格とする。欠席5回以上は単位を認定しない。再試験は筆記試験のみで評価する。

【テキスト】

1. 「生理学テキスト（第7版）」著：大地睦夫. 文光堂
2. 「生理学マスター」著：影山照雄. 医道の日本社

【参考文献】

1. 「標準生理学（第8版）」監修：小澤澗司、福田康一郎. 医学書院
2. 「ガイトン生理学 原著第11版」総監訳：御手洗玄洋. エルゼビア・ジャパン

生理学Ⅲ（講義・演習）

担当教員 齋田 和孝、田口 太郎

配当年次 2年

開講時期 第2学期

単位区分 必修

授業形態 講義・演習

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

疾患の理解や治療の実践においては、正常な人体の機能（生理学）の正しい理解が必要不可欠である。生理学Ⅰ・Ⅱで一通り学んだ内容を基礎として、ホメオスタシスおよび感覚機能に関する機能の正常状態の仕組みを説明

できるようになることを目的とする。後半では、実際のデータを見ながら生理学的現象を説明できるようになることを目的とした演習をおこなう。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容	
1	内分泌：ホルモン、視床下部・下垂体	齋田
2	内分泌：副腎皮質、副腎髄質内分泌：甲状腺	齋田
3	内分泌：甲状腺、膵臓	齋田
4	内分泌：カルシウム代謝の調節、性ホルモン	齋田
5	生殖	齋田
6	自律神経系 (小テスト)	齋田
7	体性感覚・内臓感覚	齋田
8	聴覚・前庭感覚	齋田
9	視覚	齋田
10	体温調節 (小テスト)	齋田
11	演習（1）心電図の測定	齋田・田口・平崎・井手・花田
12	演習（2）負荷心電図①トレッドミル	齋田・田口・平崎・井手・花田
13	演習（3）負荷心電図②エルゴメーター	齋田・田口・平崎・井手・花田
14	演習（4）誘発筋電図の測定：H波、M波	齋田・田口・平崎・井手・花田
15	演習（5）聴覚・平衡覚の測定：聴覚脳幹反射・重心動揺	齋田・田口・平崎・井手・花田

【履修上の注意事項】

高校の生物および化学を復習しておくこと。受講前に教科書の該当項目を必ず読んでおくこと。授業後は自分でノートを整理して復習しておくこと。演習には必ず出席すること。演習に欠席した場合、その項目のレポートは0点となる。

【評価方法】

小テスト2回分を10点に換算、筆記試験90点、合計100点とする。これに、演習のレポート各10点（計50点）を加えて合計150点とし、100点満点に換算して60点以上を合格とする。欠席5回以上は単位を認定しない。再試験は筆記試験のみで評価する。

【テキスト】

1. 「生理学テキスト（第7版）」著：大地睦夫. 文光堂
2. 「生理学マスター」著：影山照雄. 医道の日本社

【参考文献】

1. 「標準生理学（第8版）」監修：小澤澗司、福田康一郎. 医学書院
2. 「ガイトン生理学 原著第11版」総監訳：御手洗玄洋. エルゼビア・ジャパン

医用工学

担当教員 樋口 マキエ、千場 梅子、羽手村 昌宏、肥合 康弘、富吉 勝美、荒木 不次男

配当年次 1年

開講時期 第2学期

単位区分 選択

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

- 1) 放射線による検査と治療の基礎を学び、質の高いケアを可能にする。これらの医療行為には、患者の理解と協力が必要で、医療従事者による患者指導が果たす役割は大きい。医療従事者が、診療の目的・内容・方法をよく理解し、適切な前処置や介助を行えば、十分な診療情報が得られ、よい治療効果を可能にする。
- 2) 臨床検査の基礎知識と意義を学ぶ。患者の状態を正しく診断するうえで不可欠の手段となっている臨床検査の全体像と意義を総合的に理解し、医療従事者の役割を正しく把握する。

【授業の展開計画】

【授業の順番と内容】

【授業担当者・日程】

放射線と臨床利用

平成29年(月9:10-10:40)

1. 放射線概論：放射線の特性、医療被曝、放射線防護を正しく理解する。
また、放射線診療のあり方と実際の診療内容の知識を得る。 羽手村 9-25月
2. 放射線画像：CT、MRI：CTとMRIの原理と特徴を理解し、実際の診療内容を知る。 羽手村10-02月
また造影剤の特性も理解する。
3. 放射線画像：放射線画像の成立過程を理解し、いろいろな画像検査の目的と方法を習得する。 肥合10-10火
4. 核医学：安定同位体と放射性同位体の種類と性質、放射性標識化合物の種類と性質を 富吉10-16月
理解する。放射性薬剤の臨床応用と看護師の役割を理解する。
5. 核医学：同上 富吉10-26木
6. 放射線治療学：悪性腫瘍の治療における放射線療法の役割について理解し、放射線治療の原理（メカニズム）と実際の照射技術や放射線治療の副作用、最新の放射線治療法について解説する。 荒木10-30月
7. 放射線治療学： 荒木11-06月

臨床検査

平成29-30年（水13:10-14:40）

8. 生理機能検査：循環生理機能検査 樋口11-15月
9. 生理機能検査：循環生理機能検査 樋口11-22水
10. 臨床検査総論：臨床検査の種類およびその役割と評価基準 千場11-29水
11. 臨床検査総論：臨床検査の流れと看護師の役割、検体採取、保存法、感染防止、系統別臨床検査の進め方 千場12-06水
12. 臨床検査各論：一般検査、 千場12-13水
13. 臨床検査各論：血液検査、(検体検査) 化学検査 千場12-20水
14. 臨床検査各論：免疫・血清検査、ホルモン検査 千場 1-10水
15. 臨床検査各論：微生物検査、病理検査 千場 1-17水

16. 単位修得試験

樋口・千場 1-31水

【履修上の注意事項】

- 1) 医用工学の学習ノートを各自用意し、講義内容の要点を書き留め、その日の内に整理・復習する。
- 2) 講義プリントはファイルし、専門用語は正確に覚え理解する。意味が解らない時は質問する。
- 3) 「放射線と臨床利用」には『臨床放射線医学』を、「臨床検査」には『臨床検査』の教科書を持参する。
- 4) 数値の単位を理解する。

【評価方法】

筆記期末試験（100＝放射線と臨床応用47＋臨床検査53、但し原則として、両分野とも6割以上の得点で合格とする）。

【テキスト】

『臨床放射線医学』 福田国彦他9名 著、系統看護学講座 別巻、医学書院

『臨床検査』 奈良信雄 編集、系統看護学講座 別巻、医学書院

【参考文献】

『臨床検査法提要』改訂版 金井正光 編著、金原出版

『解剖生理学』 坂井建雄 岡田隆夫 著、系統看護学講座、医学書院

スポーツ医学概論

担当教員 井手 裕子

配当年次 2年

開講時期 第1学期

単位区分 選択

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

学修者が、人の一生において体を動かすことの意味を考えながら、運動にかかわる構造と機能を理解でき、これを基盤に、人々のQOLの向上と健康寿命の延長に寄与するスポーツの意義を認識できる。さらにアスリートの自己管理および心身の健康に配慮した指導や支援を可能にするために、問題発生の予防と解決に関して、その基盤となる医学的知識を習得できる。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	運動器のしくみとはたらき
2	呼吸循環器系の働きとしくみ
3	身体活動とエネルギー供給
4	アスリートの健康管理
5	アスリートの内科的障害と対策
6	特殊環境下での対応
7	アンチドーピング：ドーピングコントロールを含む
8	スポーツバイオメカニクスの基礎：運動の力学的なとらえ方
9	スポーツバイオメカニクスの基礎：走る、跳ぶ、投げる、泳ぐ、蹴るなど
10	スポーツと健康
11	スポーツ活動中に多いケガや病気
12	アスリートの外傷・障害対策
13	アスレティックリハビリテーションとトレーニング計画
14	コンディショニングの手法
15	スポーツによる精神障害と対策

【履修上の注意事項】

本講義は、日本体育協会公認スポーツ指導者資格適応科目となっているため、そのカリキュラム目標に沿って講義が展開される。アスレティックトレーナー資格取得を目指す学生は必ず受講のこと

授業後に復習をしておくこと

【評価方法】

課題レポート(20%)、自主的学修態度(10%)、試験等(70%)を総合的に判断し評価する。

【テキスト】

公認スポーツ指導者養成テキスト共通科目Ⅰ

公認スポーツ指導者養成テキスト共通科目Ⅲ 日本体育協会

【参考文献】

授業中に、適宜紹介する

運動学

担当教員 山下 忍

配当年次 2年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 第1学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

運動学は人の運動行動を知るための学問であり、運動の科学的な解析、研究を種々の医学的分野と理工学的分野の知識、手技、手段を利用して理解し、人間の運動機能を十分に理解できるようになる。さらに臨床的側面から体力増進、運動機能の低下、それに伴う機能低下の予防、治療のための運動療法について把握できるようになる。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	運動学の概要、及び運動の階層性について説明できる
2	運動の解析に必要な身体計測の方法について説明できる
3	筋力検査法の表示法、判定基準、及び要点について説明できる
4	運動力学から見た身体機能について説明できる
5	筋の構造と機能について説明できる
6	筋収縮の分類と特徴について説明できる
7	画像診断装置を用いて筋収縮の仕組みを説明できる
8	運動と循環器の機能について説明できる
9	関節トルク、反射行動について説明できる
10	トレーニングの種類とその効果について説明できる
11	デイトレーニングにおける身体機能の特徴を説明できる
12	運動の制御と出現について説明できる
13	姿勢について説明できる
14	歩行について説明できる
15	運動学習の効果について説明できる

【履修上の注意事項】

予習として教科書で予告した内容を十分に把握しておくこと。
 復習として授業内容中の指示された図をスケッチすること。
 授業後オリジナル出席カードの備考欄に授業の内容および感想を必ず書くこと。

【評価方法】

レポート30%、自主的学習態度20%、小テスト50%による総合評価

【テキスト】

『基礎運動学 第六版』中村隆一、斉藤宏著（医歯薬出版）

【参考文献】

『臨床運動学 第3版』中村隆一、斉藤宏著（医歯薬出版）

バイオメカニクス

担当教員 加藤 浩

配当年次 3年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 第1学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

バイオメカニクスは、身体運動のメカニズムを力学的側面から究明する学問である。実際に臨床現場あるいはスポーツ現場では、対象者やスポーツ選手の姿勢・動作分析を行う際、バイオメカニクス等の知識を用いて障害構造の評価、運動能力の評価、そして治療プログラムを立案を進めている場合が多い。人が「歩く」、「走る」、「跳躍する」等ということはバイオメカニクスの視点から見れば、どのような意味があるのか？身体運動・動作のメカニズムを生体力学の観点から科学的に説明出来ることを目標とする。

【授業の展開計画】

- 1□オリエンテーション
- 2□力とは何か？「ベクトル」
- 3□身体に働く力「万有引力から重力を捉える」
- 4□身体に働く力「重力加速度」
- 5□身体に働く力「重力実技（動作分析の基礎）」
- 6□身体に働く力「重力実技（起き上がりの動作分析）」
- 7□身体に働く力「運動の3法則」
- 8□身体に働く力「床反力」
- 9□身体に働く力「床反力と摩擦力」
- 10□身体に働く力「筋力」
- 11□身体に働く力「筋パワー」
- 12□身体に働く力「外部関節モーメント」
- 13□身体に働く力「内部関節モーメント」
- 14□身体に働く力「関節パワー」
- 15□身体に働く力「床反力実技」

【履修上の注意事項】

講義では時間の制約上、広く浅く講義することとなる。バイオメカニクスは動作分析・姿勢分析を実践する上で必要不可欠な重要な科目の1つであることから、学生の十分な予習、復習が必要である。

【評価方法】

定期試験を100%として評価する。

【テキスト】

【参考文献】

Kirsten Gotz-Neumann：観察による歩行分析．医学書院，東京，2005，2．江原義弘・山本澄子：ボディダイナミクス入門 歩き始めと歩行分析．医歯薬出版．2002

運動生理学

担当教員 坂本 将基

配当年次 1年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 第2学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

1. 学修者が体の構造と機能に関する基礎を理解し、説明できるようになる。
2. 学修者が運動に対する体の応答や運動トレーニングによる体の適応を理解し、説明できるようになる。
3. 学修者が特殊環境下での運動時のからだの働きを理解し、説明できるようになる。

【授業の展開計画】

1. 運動と呼吸
2. 運動と循環（心臓）
3. 運動と循環（血液）
4. 神経系による運動の調節（末梢神経）
5. 神経系による運動の調節（中枢神経）
6. 骨格筋と運動（筋収縮のエネルギー供給）
7. 骨格筋と運動（筋線維の種類とその特徴）
8. 運動と内分泌
9. 運動中の基質・エネルギー代謝（疲労を含む）
10. 運動と免疫能
11. 運動と環境（高温・寒冷環境）
12. 運動と環境（水中環境）
13. 運動と体温調節
14. 運動と発育・発達・老化
15. 運動時の水分・栄養摂取

【履修上の注意事項】

授業前には資料や参考文献に目を通し、授業で取り扱う内容を大まかに把握しておくこと。また、毎回の授業終了後、授業内容の理解を深めるよう各自努めること。

【評価方法】

期末筆記試験による(100%)

【テキスト】

受講にテキストは必須ではないが、自学のために以下の参考文献を推薦する。

【参考文献】

「スポーツ 運動生理学概説」山地啓司 大築立志 田中宏暁 編著 明和出版

医学概論

担当教員 齋田 和孝

配当年次 1年

単位区分 必修

準備事項

備考

開講時期 第1学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

現代の医療体制は歴史の流れの中で変遷した結果であり、これからも変化していく。本講義を通して、医療の全体像を歴史と文化の視点から俯瞰することができるようになる。さらに、レポート課題やグループワークを通して、現在の医療制度とその課題や本来あるべき医療の姿について自ら考え、考察できるようになることを目的とする。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	医学概論で学ぶこと（レポート課題の説明）、医療とは何か①
2	医学と医療の歴史（1）古代
3	医学と医療の歴史（2）中世、ルネサンス
4	医学と医療の歴史（3）近代①
5	医学と医療の歴史（4）近代②
6	医学と医療の歴史（5）19世紀以降
7	医学と医療の歴史（6）日本の医療
8	現代の医療（1）健康の定義、疾病構造、ヘルスプロモーション
9	現代の医療（2）生活習慣病と健診（含：がんの疫学・予防ほか）
10	現代の医療（3）医療従事者と施設
11	現代の医療（4）医療経済と医療保険・制度
12	医療の倫理（医療者と患者、社会の倫理）
13	バイオエシックス、医療とは何か②
14	グループワークの発表（1）
15	グループワークの発表（2）

【履修上の注意事項】

問題意識をもって自ら考え学ぶ姿勢を重視するため、レポート課題とグループワークを重視する。レポート課題は新聞記事に題材を求めるとのこと、普段から新聞をチェックしておくこと。なお、レポート未提出者はグループワークに加われない。

【評価方法】

レポート提出とグループワーク（GW）参加を必須条件とし、レポート未提出者の筆記試験は評価しない。レポート課題20点、GW発表時の課題10点、筆記試験70点の合計100点とし、総合して60点以上を合格とする。なお、再試験は筆記試験のみで60%以上を合格とする。また、欠席5回以上は単位を認定しない。

【テキスト】

「医療概論」編：社団法人東洋療法学校協会、監修：中川米造、医歯薬出版株式会社

【参考文献】

なし

病理学

担当教員 齋田 和孝

配当年次 2年

単位区分 必修

準備事項

備考

開講時期 第1学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

病理学とは疾患や病的状態の本質や成り立ちを理論的に解明して理解する学問である。本講義では、①疾病の成り立ちに関わる基本的な機序を説明できる、②その結果引き起こされる組織や臓器の変化について説明できる、の2点を目的とし、各種疾患における病態生理や臨床症状を説明できるようになるための基礎を身につける。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	細胞の異常—病気の本態
2	先天異常
3	循環障害（1）局所性の循環障害
4	循環障害（2）全身性の循環障害
5	代謝異常（1）糖代謝、脂質代謝
6	代謝異常（2）タンパク代謝、カルシウム代謝
7	老化
8	感染と感染症（1）感染の成立と経過
9	感染と感染症（2）感染防御機能と日和見感染
10	免疫と免疫異常（1）免疫機構
11	免疫と免疫異常（2）アレルギー、免疫不全
12	炎症
13	腫瘍（1）腫瘍の特徴と分類
14	腫瘍（2）発がんと進展
15	腫瘍（3）腫瘍マーカーと診断治療

【履修上の注意事項】

人体の正常な仕組みを理解していることが前提となるので、必ず解剖学と生理学を復習しておくこと。受講前に教科書の該当項目を必ず読んでおくこと。授業後は自分でノートを整理して復習しておくこと。

【評価方法】

筆記試験100%、筆記試験60点以上を合格とする。欠席5回以上は単位を認定しない。

【テキスト】

「なるほどなっとく！病理学 病態形成の基本的なしくみ」著：小林正伸、南山堂

【参考文献】

1. 「カラーアトラス病態病理学（改訂2版）」共著：長澤治夫、鈴木博義、丸善出版
2. 「カラー ルービン病理学—臨床医学への基盤—」監訳：鈴木利光ほか、西村書店

臨床医学総論 I

担当教員 未定

配当年次 3年

単位区分 必修

開講時期 第1学期

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考 平成30年度から開講

【授業のねらい】

医療の実践は患者の状態を科学的に観察し正しく把握することから始まる。この基本的原則は東洋医学、西洋医学にかかわらず、すべての医療職者の実践における基礎となる。本講義「臨床医学総論 I」では、まず診察の概要と基本的な方法を学んだ上で、全身および局所の診察法を系統的に理解し、それぞれの所見の意味を説明でき、かつ鑑別診断を上げることができるようになることを目的とする。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	臨床医学入門、診察の概要
2	診察の方法① 病歴聴取
3	診察の方法② 視診、触診、打診、聴診、他
4	バイタルサイン
5	全身の診察① 顔貌、精神状態、言語
6	全身の診察② 身体計測、体格、栄養状態
7	全身の診察③ 姿勢、体位、歩行
8	全身の診察④ 皮膚、爪、リンパ節
9	局所の診察① 頭部、顔面
10	局所の診察② 眼、鼻、耳、口腔、頸部
11	局所の診察③ 胸部、乳房
12	局所の診察④ 肺・胸膜
13	局所の診察⑤ 心臓
14	局所の診察⑥ 腹部
15	局所の診察⑦ 背部、四肢

【履修上の注意事項】

多くの専門用語が出てくるので、必ず教科書を予習してくること。授業後は自分でノートを整理して復習しておくこと。

【評価方法】

筆記試験100%、筆記試験60点以上を合格とする。欠席5回以上は単位を認定しない。

【テキスト】

「臨床医学総論 第2版」編：社団法人東洋療法学校協会、著：奈良信雄、医歯薬出版株式会社

【参考文献】

1. 「診察と手技が見えるVol.1」編集：古谷伸之、MEDIC MEDIA
2. 「内科診断学（改訂第17版）」著：武内重五郎、南江堂

臨床医学総論Ⅱ

担当教員 未定

配当年次 3年

単位区分 必修

開講時期 第2学期

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考 平成30年度から開講

【授業のねらい】

医療の実践は患者の状態を科学的に観察し正しく把握することから始まる。「臨床医学総論Ⅱ」では、まず神経系の診察法と運動機能検査について理解し、鑑別診断を挙げることができるようになることを目的とする。次いで、臨床検査の概要をと検査値の意味を説明できる、さらに、日常的によく遭遇する概念や病態生理を理解し、代表的な原因疾患の特徴を説明できるようになることを目的とする。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	神経系の診察① 感覚、反射
2	神経系の診察② 脳神経、その他
3	運動機能検査① 運動麻痺、不随意運動、日常生活動作
4	運動機能検査② 整形外科的検査法
5	臨床検査法 一般検査、血液生化学検査、その他の検査
6	主な症状① 頭痛、めまい、難聴
7	主な症状② 咳・痰、息切れ
8	主な症状③ 動悸、胸痛
9	主な症状④ 腹痛、悪心・嘔吐、食欲不振
10	主な症状⑤ 便秘、下痢、吐血・下血
11	主な症状⑥ 排尿障害、乏尿・無尿、多尿
12	主な症状⑦ 頸肩腕痛、腰痛、関節痛
13	運動と医療① メディカルチェックの重要性
14	運動と医療② オーバートレーニング、貧血
15	治療学 概要、薬物療法、理学療法、その他の治療

【履修上の注意事項】

多くの専門用語が出てくるので、必ず教科書を予習してくること。授業後は自分でノートを整理して復習しておくこと。

【評価方法】

筆記試験100%、筆記試験60点以上を合格とする。欠席5回以上は単位を認定しない。

【テキスト】

「臨床医学総論 第2版」編：社団法人東洋療法学校協会、著：奈良信雄、医歯薬出版株式会社

【参考文献】

なし

臨床医学各論 I (呼吸器・循環器系)

担当教員 齋田 和孝

配当年次 2年

単位区分 必修

準備事項

備考

開講時期 第1学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

本講義では呼吸器系および循環器系の各疾患の症候・病態・診断・治療に関する特徴を学び、疾患が成り立つ機序としての病理学的変化が臨床的症候と密接な関係にあることを理解する。特に代表的な重要疾患について、その臨床的特徴を説明できるようになることを目的とする。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	呼吸器：呼吸機能検査
2	呼吸器：呼吸器感染症（肺炎、肺結核）（含：かぜ症候群、気管支炎）
3	呼吸器：COPD、気管支喘息（運動誘発性喘息を含む）
4	呼吸器：過敏性肺炎、間質性肺疾患
5	呼吸器：原発性肺癌、転移性肺腫瘍
6	呼吸器：呼吸不全とCO2ナルコーシス
7	呼吸器：気胸、過換気症候群
8	循環器：心不全
9	循環器：不整脈
10	循環器：虚血性心疾患（狭心症、心筋梗塞）、負荷心電図
11	循環器：心筋症、心筋炎、心内膜炎
12	循環器：弁膜疾患
13	循環器：先天性心疾患
14	循環器：血圧異常（高血圧症、低血圧症）
15	循環器：動静脈疾患（動脈硬化症、大動脈瘤、静脈瘤）

【履修上の注意事項】

呼吸器系と循環器系の解剖学および生理学を復習しておくこと。受講前に教科書の該当項目を必ず読んでおくこと。授業後は自分でノートを整理して復習しておくこと。なお、教科書は「臨床医学各論 I、II、V、VI」の4科目を通して使用する。

【評価方法】

筆記試験100%、筆記試験60点以上を合格とする。欠席5回以上は単位を認定しない。

【テキスト】

「看護のための臨床病態学（第3版）」編集：浅野嘉延、吉山直樹。南山堂

【参考文献】

「臨床医学各論（第2版）」編：（社）東洋療法学校協会。医歯薬出版（株）

臨床医学各論Ⅱ（消化器系・泌尿器系）

担当教員 齋田 和孝

配当年次 2年

開講時期 第2学期

単位区分 必修

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

本講義では消化管、肝胆膵および腎・尿路系の各疾患の症候・病態・診断・治療に関する特徴を学び、疾患が成り立つ機序としての病理学的変化が臨床的症候と密接な関係にあることを理解する。特に代表的な重要疾患について、その臨床的特徴を説明できるようになることを目的とする。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	消化管：食道疾患（食道炎、GERD、食道癌）
2	消化管：胃疾患（胃炎、消化性潰瘍、胃癌、胃切除後症候群）
3	消化管：腸疾患（虫垂炎、潰瘍性大腸炎、クローン病）
4	消化管：腸疾患（イレウス、過敏性腸症候群、大腸癌）
5	肝胆膵：肝機能検査、門脈圧亢進、肝性脳症
6	肝胆膵：肝疾患（急性肝炎、劇症肝炎）
7	肝胆膵：肝疾患（慢性肝炎、肝硬変）
8	肝胆膵：肝疾患（肝細胞癌、転移性肝癌）
9	肝胆膵：肝疾患（アルコール性肝障害、脂肪肝、NASH）
10	肝胆膵：胆道疾患（胆石症、胆嚢炎、胆管炎）
11	肝胆膵：膵疾患（急性膵炎、慢性膵炎、膵癌）
12	腎・尿路：慢性腎臓病、腎不全（急性腎不全、慢性腎不全）
13	腎・尿路：原発性糸球体疾患（糸球体腎炎、ネフローゼ症候群）
14	腎・尿路：全身性疾患に伴う腎障害（糖尿病性腎症、腎硬化症、痛風腎）
15	腎・尿路：尿路結石症、尿路感染症、前立腺肥大症

【履修上の注意事項】

消化管、肝胆膵および腎・尿路系の解剖学および生理学を復習しておくこと。受講前に教科書の該当項目を必ず読んでおくこと。授業後は自分でノートを整理して復習しておくこと。なお、教科書は「臨床医学各論Ⅰ、Ⅱ、Ⅴ、Ⅵ」の4科目を通して使用する。

【評価方法】

筆記試験100%、筆記試験60点以上を合格とする。欠席5回以上は単位を認定しない。

【テキスト】

「看護のための臨床病態学（第3版）」編集：浅野嘉延、吉山直樹、南山堂

【参考文献】

「臨床医学各論（第2版）」編：（社）東洋療法学校協会、医歯薬出版（株）

臨床医学各論Ⅲ（整形外科）

担当教員 忽那 龍雄、未定

配当年次 2年

開講時期 第2学期

単位区分 必修

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

運動器の構造と機能を理解し、骨・関節・筋・神経にもたらされる疾病の成り立ちを認識して、整形外科診療の手順を習得する。総論では関節運動の障害、骨・関節変形や疼痛の機序を理解する。各論では多種・多彩な運動器疾病の症状と診断の要点、並びに治療上の問題点について、説明をすることができる。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	総論;関節の運動域、運動域異常の定義、良肢位の意義について説明することができる
2	四肢、脊柱の先天性、後天性の骨・関節変形の種類と原因について説明することができる
3	運動器慢性痛の機序、整形外科的治療法、及びロコモティブ症候群について説明することができる
4	各論Ⅰ骨の疾患；骨折の原因、治癒機序、合併症、並びに疲労骨折の特徴について説明できる
5	上肢、下肢、および脊柱の代表的な骨折の特徴と治療上の問題点について説明することができる、
6	骨端症、骨壊死、化膿性骨髓炎、骨・関節結核の病態と治療法並びに転帰についての説明ができる
7	骨粗鬆症、骨軟化症などの代謝性骨疾患の原因並びに予防対策について説明することができる
8	骨・軟部腫瘍の特徴と、骨系統疾患、奇形症候群がどのような疾患であるかについて説明できる、
9	各論Ⅱ関節の疾患；肘内障、靭帯損傷、脱臼、化膿性関節炎の病態、治療指針について説明できる。
10	関節リウマチ、若年性特発性関節炎、多発筋痛症等のリウマチ疾患の病態と治療指針が説明できる
11	変形性関節症、神経障害性関節症、及び痛風、偽痛風による関節障害の機序、治療法が説明できる
12	各論Ⅲ脊椎・脊髄の疾患；椎体骨折、脊髄損傷の病型、高位診断、及び予後について説明できる
13	靭帯骨化症、脊柱管狭窄症による脊髄症・神経根症の発症機序について説明できる
14	椎間板ヘルニア、脊椎分離・辻り症、非特異性腰痛症、強直性脊椎炎の病態について説明できる
15	各論Ⅳ筋、腱の病気；筋拘縮症、サルコペニア、腱附着部炎の病態について説明できる

【履修上の注意事項】

骨格の成り立ち、脊柱の特徴、骨・関節・筋・神経の働きについて、解剖学の知識をよく復習しておくこと。

【評価方法】

確認試験点数100%

【テキスト】

カラーで学べる病理学 第4版 編集；渡辺照男 スーベルヒロカワ

【参考文献】

臨床医学各論Ⅳ（スポーツ障害）

担当教員 未定

配当年次 3年

単位区分 必修

開講時期 第1学期

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

スポーツには文化の創造、体力作りなどの効用がある一方、外傷や心身の障害が起きることもあり、注意しなければならない。ここでは、スポーツ活動が原因して発症する内因性、外因性のスポーツ傷害について、疾病の成り立ちと治療法を学び、スポーツ指導者として、外傷・障害の発生の機序と予防対策を説明することができる。

また、スポーツの効用が最大限に達成できるように競技者の身体活動をケアすることについて説明することができる。

【授業の展開計画】

1. スポーツの広がり、並びにスポーツ医・科学の現況と問題点を説明することができる。
2. 筋肉・腱・神経のスポーツ傷害（肉離れ・腱断裂・神経炎）の発生機序と治療法について説明できる。
3. 捻挫、関節内障、衝突障害等の上肢、下肢におけるの関節傷害の発生機序について説明することができる。
4. 剥離骨折、疲労骨折、種子骨障害、などの上肢、下肢のスポーツ骨傷害の特異性を説明することができる。
5. 腰椎分離症、頸髄損傷等のスポーツによる脊椎・脊髄障害の病態と転帰について説明することができる。
6. ランニング障害、野球肘、などの競技種目別の障害発生機序、及び予防策を説明することができる。
7. 使いすぎ症候群、反復運動損傷、廃用症候群の病態について説明することができる。
8. オーバートレーニング症候群、鼠蹊部痛症候群の機序、病態、予防対策について説明することができる。
9. 貧血、月経異常、突然死、熱中症、頭部外傷について、競技中の注意事項を説明することができる。
10. 子供のスポーツ障害の特徴と治療上の問題点、並びに安全対策を説明することができる。
11. サルコペニア、骨粗鬆症の成因、及び高齢者の安全な健康運動プログラムについて説明することができる。
12. 内科的・整形外科的メディカルチェックの意義、手法について説明することができる。
13. スポーツ傷害の治療の特殊性と外傷に対する救急初療について認識する。
14. アスレチックリハビリテーションのアプローチ、ゴール設定について説明することができる。
15. ドーピングコントロールの目的、手順について説明することができる。

【履修上の注意事項】

スポーツ競技の基本動作、運動強度、エネルギー代謝の様式を理解して、スポーツ活動による生体の生理学的な変化を調べておくこと。

【評価方法】

筆記試験100%

【テキスト】

使用しない

【参考文献】

- ①中島 寛之 編著 スポーツ外傷と障害 文光堂
- ②宮永 豊 ほか アスレチックトレーナーのスポーツ医学 文光堂

臨床医学各論V（皮膚・免疫系）

担当教員 齋田 和孝

配当年次 3年

単位区分 必修

準備事項

備考

開講時期 第1学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

本講義では免疫・アレルギー、感染症および代謝・内分泌系の各疾患の症候・病態・診断・治療に関する特徴を学び、疾患が成り立つ機序としての病理学的変化が臨床的症候と密接な関係にあることを理解する。特に代表的な重要疾患について、その臨床的特徴を説明できるようになることを目的とする。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	免疫・アレルギー：膠原病（関節リウマチ、SLE、SSc）
2	免疫・アレルギー：膠原病（血管炎症候群）
3	免疫・アレルギー：シェーグレン症候群、ベーチェット病
4	免疫・アレルギー：アレルギー疾患（アナフィラキシーショック含む）、AIDS
5	感染症：敗血症（SIRSを含む）、予防と診断・治療
6	感染症：ウイルス感染（麻疹、風疹ほか）
7	感染症：食中毒
8	代謝・栄養：糖質代謝、脂質代謝
9	代謝・栄養：肥満症、メタボリックシンドローム
10	代謝・栄養：糖尿病
11	代謝・栄養：脂質異常症、痛風、骨粗鬆症
12	内分泌：下垂体疾患
13	内分泌：甲状腺疾患
14	内分泌：副甲状腺疾患
15	内分泌：副腎皮質疾患、副腎髄質疾患

【履修上の注意事項】

免疫・アレルギー、感染症および代謝・内分泌系に関する解剖学、生理学および病理学を復習しておくこと。受講前に教科書の該当項目を必ず読んでおくこと。授業後は自分でノートを整理して復習しておくこと。なお、教科書は「臨床医学各論Ⅰ、Ⅱ、Ⅴ、Ⅵ」の4科目を通して使用する。

【評価方法】

筆記試験100%、筆記試験60点以上を合格とする。欠席5回以上は単位を認定しない。

【テキスト】

「わかりやすい内科学（第4版）」編集主幹：井村裕夫．文光社

【参考文献】

「臨床医学各論（第2版）」編：（社）東洋療法学校協会．医歯薬出版（株）
 「看護のための臨床病態学」編集：浅野嘉延、吉山直樹．南山堂

臨床医学各論VI（脳神経疾患・婦人科系疾患）

担当教員 齋田 和孝

配当年次 3年

開講時期 第2学期

単位区分 必修

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

本講義では脳神経系および血液系その他の各疾患の症候・病態・診断・治療に関する特徴を学び、疾患が成り立つ機序としての病理学的変化が臨床的症候と密接な関係にあることを理解する。特に代表的な重要疾患について、その臨床的特徴を説明できるようになることを目的とする。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	脳神経：総論
2	脳神経：脳血管疾患（脳出血、くも膜下出血、脳梗塞）
3	脳神経：感染性疾患（髄膜炎、脳炎）脳腫瘍
4	脳神経：変性疾患（パーキンソン病、脊髄小脳変性症）
5	脳神経：筋萎縮性側索硬化症
6	脳神経：末梢神経疾患（ギランバレー症候群、ニューロパチー、神経痛）
7	脳神経：筋疾患（筋ジストロフィー、重症筋無力症、ミトコンドリア脳筋症）
8	脳神経：認知症（アルツハイマー病ほか）
9	血液：貧血
10	血液：急性白血病、慢性白血病
11	血液：悪性リンパ腫、骨髄腫
12	血液：紫斑病、血友病、DIC
13	皮膚疾患：接触性皮膚炎、アトピー性皮膚炎
14	眼科疾患：結膜炎、白内障、緑内障
15	耳鼻科疾患：メニエール病、中耳炎、難聴

【履修上の注意事項】

脳神経系、血液系および皮膚・感覚系に関する解剖学および生理学を復習しておくこと。受講前に教科書の該当項目を必ず読んでおくこと。授業後は自分でノートを整理して復習しておくこと。なお、教科書は「臨床医学各論Ⅰ、Ⅱ、Ⅴ、Ⅵ」の4科目を通して使用する。

【評価方法】

筆記試験100%、筆記試験60点以上を合格とする。欠席5回以上は単位を認定しない。

【テキスト】

「わかりやすい内科学（第4版）」編集主幹：井村裕夫．文光社

【参考文献】

「臨床医学各論（第2版）」編：（社）東洋療法学校協会．医歯薬出版（株）
「看護のための臨床病態学」編集：浅野嘉延、吉山直樹．南山堂

リハビリテーション概論

担当教員 川俣 幹雄

配当年次 2年

開講時期 第1学期

単位区分 必修

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

リハビリテーションの理念、歴史、障害理論および関連する制度等について学ぶ。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	リハビリテーションとは（定義、理念、思想）
2	リハビリテーションの歴史
3	リハビリテーションと障害医学
4	障害の理論的モデル：ICIDH
5	障害の理論的モデル：ICF
6	リハビリテーションと関連職種
7	医学的リハビリテーション
8	社会的、職業的リハビリテーション
9	リハビリテーションの対象
10	リハビリテーションと社会制度
11	地域リハビリテーション
12	リハビリテーションと環境整備
13	介護予防とリハビリテーション
14	予防医学とリハビリテーション
15	リハビリテーションを取り巻く環境と今後の課題

【履修上の注意事項】

事前にテキストの該当箇所を学習し、授業に臨むこと。復習をしっかりと行うこと。

【評価方法】

期末試験100%で評価する。

【テキスト】

『医学生・コメディカルのための手引書 リハビリテーション概論改訂最新版』 上好秋孝、編著（永井書店）

【参考文献】

『入門リハビリテーション概論』中村隆一編（医歯薬出版）、『入門リハビリテーション医学』中村隆一監修（医歯薬出版）、『社会福祉小六法』（ミネルバ書房）、『リハビリテーション』砂原茂一著（岩波新書-139）など

リハビリテーション医学

担当教員 田口 太郎、浅井 福太郎、久保 春子、未定

配当年次 2年

開講時期 第2学期

単位区分 必修

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

医学的リハビリテーションの対象となる疾患について、病態、評価法、治療法、訓練プログラムなどの概要を理解する。また、障害やその治療のメカニズムを理解するために不可欠な運動学の基礎を学習する。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	リハビリテーション治療(1)：理学療法・・・定義/運動療法/物理療法/治療体操
2	リハビリテーション治療(2)：作業療法/言語聴覚療法/義肢装具療法/福祉機器と住環境整備
3	運動学(1)：総論/姿勢と運動のコントロール
4	運動学(2)：骨・関節・筋の解剖学と生理学
5	運動学(3)：神経・脈管の解剖学と生理学
6	運動学(4)：四肢と体幹の運動① 上肢と体幹
7	運動学(5)：四肢と体幹の運動② 下肢/歩行
8	障害の評価(1)：機能・形態の評価① 四肢長/周径/関節可動域
9	障害の評価(2)：機能・形態の評価② MMT/腱反射
10	障害の評価(3)：活動および活動制限/運動麻痺/高次脳機能/心理的評価
11	各論(1)：神経疾患のリハビリテーション
12	各論(2)：運動器疾患のリハビリテーション
13	各論(3)：呼吸器疾患のリハビリテーション
14	各論(4)：心疾患のリハビリテーション
15	各論(5)：小児疾患のリハビリテーション

【履修上の注意事項】

解剖学・生理学・リハビリテーション概論の知識が欠かせない。また、各論においては該当領域の疾患の理解が必須である。いずれもよく復習をしてから講義に臨むこと。

【評価方法】

学期末筆記試験(70%) + 講義中の小テスト・課題(30%)

【テキスト】

『リハビリテーション総論 改訂第2版』 椿原彰夫 著 (診断と治療社)

『解剖学マスター』、『生理学マスター』 影山照雄 著 (医道の日本社) 、講義時配布資料

【参考文献】

『リハビリテーション医学 第3版』 東洋療法学校協会編 (医歯薬出版)

他、講義時に適宜紹介する。

薬理学

担当教員 樋口 マキエ

配当年次 2年

開講時期 第2学期

単位区分 選択

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

薬物とは、生体の恒常性（ホメオスタシス）の破綻による生体機能の異常（病態）を正常範囲に戻そうとする目的で使用される化学物質である。疾病の予防、診断および治療に用いられる。日進月歩の薬物療法が、医療・看護の現場で適正に行われているか判断できるよう、各種の薬物を系統的に把握し理解する。基本的な薬理学の知識と論理的思考を学習し、副作用の発現防止に寄与する。

【授業の展開計画】

【授業内容】

原因療法薬（化学療法薬：抗病原微生物薬と抗がん薬）については、感染症学と病態生理学Ⅰで教授した。ここでは、対症療法薬について教授する。正常な人体の構造と機能および病態を復習しながら、人体に対する薬物の有益な作用と副作用およびその機序を、系統的に教授する。さらに、薬物の生体内運命を理解させ、対症療法薬の臨床応用および適用方法を把握させる。

【授業日程】

薬理学総論

平成28-29年16:30-18:00(月)

1. 薬とは、治験、薬と法令
生体の情報伝達系（生体の信号と応答、情報伝達物質、受容体）、作用薬と拮抗薬 9/26 (月)
2. 生体に対する薬物の働きかけ：薬理作用、用量-反応関係 10/03 (月)
3. 薬物に対する生体の働きかけ：生体内の薬の動きと反応に影響を与える因子 10/11 (火)
4. エイジングと薬 10/17 (月)

生体の機能異常（病態）と薬

5. 末梢神経系作用薬：自律神経作用薬（アドレナリン作働薬・遮断薬） 10/31 (月)
6. 末梢神経系作用薬：自律神経作用薬（コリン作働薬・遮断薬） 11/02 (水)
7. 末梢神経系作用薬：運動神経作用薬（筋弛緩薬）、感覚神経作用薬（局所麻酔薬） 11/07 (月)
8. 代謝・内分泌系作用薬：糖尿病治療薬、消化系作用薬：潰瘍治療薬 11/14 (月)
9. 免疫系作用薬：抗アレルギー薬、解熱鎮痛薬（NSAIDS）、ステロイド性抗炎症薬 11/21 (月)
10. 循環系作用薬：抗高血圧薬、利尿薬 11/28 (月)
11. 循環系作用薬：虚血性心疾患治療薬、抗血栓薬、抗不整脈薬 12/05 (月)
12. 循環系作用薬：心不全治療 12/12 (月)
13. 中枢神経系作用薬：全身麻酔薬、麻薬性鎮痛薬 12/19 (月)
14. 中枢神経系作用薬：睡眠薬、抗不安薬、抗うつ薬、 1/16 (月)
15. 中枢神経系作用薬：抗精神病薬、抗パーキンソン病薬、抗てんかん薬 1/23 (月)

16. 単位修得試験

1/30 (月)

【履修上の注意事項】

- 1) ノートを各自用意し講義内容の要点を記す。その日の内に教科書を読み込み内容を整理・復習する。
- 2) 講義プリントはファイルし、薬理学授業時に、教科書、ノートと一緒に必ず持ってくる。
- 3) 専門用語は正確に覚え、その概念を正しく理解する。理解できないときは、質問する。
- 4) 授業参加は最低要件であり十分要件ではない。

【評価方法】

- 1) 学期末の本試験（100%：筆記試験）で評価する。前提条件は2/3以上の出席。
- 2) 「薬物療法の基礎知識を用い、論理的思考を展開できる」を評価基準とする。

【テキスト】

- 1) コメディカルのための薬理学 第2版（渡邊、樋口/編 朝倉書店 3,900円）
- 2) 教員作成プリント

【参考文献】

- 1) 看護の基礎固め ひとり勝ち薬理学（自律神経系） 片野/編 メディカルレビュー社 1,600円
- 2) 薬理学 第13版 吉岡, 泉, 伊関著, 医学書院 2,300円
- 3) 『今日の治療薬2016』 浦部, 島田, 川合編, 南江堂

医事法規

担当教員 野崎 和義

配当年次 2年

単位区分 必修

開講時期 第2学期

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

- 1 医療行為を中核とする現行医事法制のなかで鍼灸師の法的位置づけを理解する。
- 2 医療専門職に課せられた社会的責務と業務上の責任を理解する。
- 3 各種医療専門職との協力、福祉従事者との連携のために必要とされる法を理解する。
- 4 今日の医療制度の仕組みとその問題点を理解する。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	市民の法と専門職の法——市民法の基礎、鍼灸師の法的位置づけ
2	医療職と法——守秘義務と個人情報保護の保護、三層の法構造
3	医業の独占——医療行為、「業」による規制、医療行為の拡散
4	治療行為と同意（1）——医療行為と治療行為、同意能力、乳幼児と医療ネグレクト
5	治療行為と同意（2）——家族による同意、成年後見制度と治療同意権
6	診療の補助と医師の指示——具体的指示と包括的指示、メディカルコントロール
7	医療職と刑事責任（1）——終末期医療と家族
8	医療職と刑事責任（2）——チーム医療と信頼の原則、実習生による事故とその対応
9	チーム医療と民事責任（1）——民事責任の構造、医療従事者の注意義務
10	チーム医療と民事責任（2）——鍼灸師の過失
11	医療過誤と訴訟——訴訟の目的とその限界、医療ADRの取り組み
12	鍼灸師と労働法——労働契約の特殊性、院内暴力・セクハラ
13	医療制度と法——医療制度改革、医療法の改正
14	鍼灸師の資格と業務（1）——鍼灸師の資格要件
15	鍼灸師の資格と業務（2）——業務の物的側面・人的側面

【履修上の注意事項】

- ・準備学習：各回のテーマに即して教科書を読んでおくこと。
- ・事後学習：講義で示された課題をもとに教科書および関連事項を整理すること。
- ・講義の進行は、理解度に応じて変更することがある。その際には、あらかじめ通知する。

【評価方法】

定期試験（100%）の成績によって評価する。

【テキスト】

野崎和義著『医事法学概論』2011年、ミネルヴァ書房。
野崎和義監修『社会福祉六法』2017年、ミネルヴァ書房（過年度版でも可）。

【参考文献】

各回の講義の際に紹介する。

保健福祉論

担当教員 齋田 和孝

配当年次 2年

開講時期 第2学期

単位区分 選択

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

保健福祉は「人々のもつ健康問題や生活問題に対応してそれらの問題を解決し、よりよい方向を見出す行動であり機能である」と言われる。本講義の目的は次の3点である。①健康と医療における問題およびその対策について説明できる。②地域社会における医療の役割と現状を説明できる。③医療における人間尊重について説明できる。

【授業の展開計画】

教科書およびその内容理解を助けるプリントを配付し、以下の内容について講義を進める。

週	授 業 の 内 容
1	健康の定義と医療の目的
2	社会保障と医療保険
3	日本の医療の現状
4	日本の医療における問題点
5	生活習慣病と健康日本21
6	産業保健
7	学校保健
8	高齢者医療と介護保険
9	介護予防
10	医療職の役割とチーム医療
11	医療安全
12	医の倫理
13	患者の権利
14	終末期医療と尊厳死
15	医療と法律

【履修上の注意事項】

受講前に教科書の該当項目を必ず読んでおくこと。授業後は自分でノートを整理して復習しておくこと。

【評価方法】

筆記試験100%とし、筆記試験60点以上を合格とする。欠席5回以上は単位を認定しない。

【テキスト】

「現代医学概論」 医歯薬出版株式会社

【参考文献】

とくになし

社会保障論

担当教員 河谷 はるみ

配当年次 3年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 第1学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

社会保険は、公的扶助とならんで社会保障制度の重要な柱として発展してきた。はじめに、社会保障の概念や対象及び理念を学び、欧米や日本の社会保障の発展過程を概観する。そして、社会保障の体系と財政、費用を学んだ後、各論（特に、年金保険制度と医療保険制度）の具体的な内容について理解する。社会保障論では、少子高齢化を迎えて、社会保障をどのように再構築したらよいかを考えることができる。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	オリエンテーション、社会保障の概念
2	現代社会における社会保障制度の課題
3	欧米における社会保障の歴史（発展過程）
4	日本における社会保障の歴史（発展過程）
5	社会保障制度の体系と概要（社会保険と社会扶助）
6	社会保障の財源と費用
7	社会保障の行財政
8	年金保険制度の沿革と概要
9	年金保険制度の具体的な仕組みと財政、給付の内容
10	年金保険制度をめぐる動向と今後の課題
11	医療保険制度の沿革と概要
12	医療保険制度の具体的な仕組みと財政、給付の内容
13	医療保険制度をめぐる動向と今後の課題
14	年金保険制度と医療保険制度の将来像
15	社会保障制度の再構築

【履修上の注意事項】

- (1) 必ず、テキストを持参して受講すること。
- (2) 予習をして授業に臨み、授業後は、復習をすること。

【評価方法】

試験80% レポート20%

【テキスト】

社会福祉士養成講座編集委員会編『新・社会福祉士養成講座12 社会保障【第5版】』（中央法規出版、2016年）

【参考文献】

掠野美智子・田中耕太郎編『はじめての社会保障【第13版】』（有斐閣、2016年）
今井伸編『わかる・みえる社会保障論-事例でつかむ社会保障入門-』（みらい、2016年）

地域保健論

担当教員 新任教員

配当年次 2年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 第2学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

健康の問題は、健康づくり、疾病の予防、疾病の治療、リハビリテーションの各レベルにおける社会の対応の問題としてとらえられるが、近年その解決に当たっては地域社会を基盤として取り組むことが高まってきている。そこで、本講義では、①地域社会の変容およびそれに付随して発生している地域の多様な健康問題について理解を深めること、②地域社会における健康対策の考え方や地域保健活動の重要性について理解し、③地域保健を推進するための能力を養うこと、を目標としている。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	オリエンテーション 地域保健について
2	地域社会と健康問題 都市化社会と健康
3	地域社会と健康問題 生活意識と健康
4	健康問題の変容とその対策の変化
5	地域保健の考え方に関わる圏域の設定と課題
6	地域保健活動に関わる主体と特徴
7	保健・医療・福祉と市町村の役割
8	保健・医療・福祉に関する計画
9	保健・医療・福祉の連携と統合 供給体制の統合化
10	保健・医療・福祉の連携と総合 具体的展開
11	世界と日本における健康づくり活動（ヘルスプロモーション）の動向
12	健康都市づくり（ヘルシー・シティ）の考え方
13	健康都市とその活動事例
14	健康日本21と健康増進法
15	地域保健活動推進の方法、プリシード・プロシードモデル

【履修上の注意事項】

日々報道される健康問題のニュースに関心を払うことが望ましい。また、受講の前後にはシラバスに沿って該当する内容に関連する項目等について学習することが望まれる。

【評価方法】

- ①レポートの提出、期末試験の総合点で判定する。したがって、受講する学生は、講義に必ず出席し、課題についてもきちんと提出するように心がけること。
- ②評価の方法は、レポート10%、試験900%の割合で行う。

【テキスト】

使用しない。

【参考文献】

必要に応じ資料を配布する。参考書については講義の中で指示する。

学校保健

担当教員 未定

配当年次 2年

単位区分 選択

準備事項

備考 平成30年から開講する

開講時期 第1学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

児童生徒の発育・発達、健康、そして学校教育法につながる指導要領等の教育の基礎を把握するとともに、児童生徒の実態から保健教育、保健管理、組織活動の諸活動を理解し、これら学校保健活動の計画と組織を教育計画と学校組織との関連でとらえ、教育の中の学校保健の全貌を説明できる。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	学校保健概論・・・学校保健と関連法、学校保健の目的、学校保健の構造
2	学校保健概論・・・地域保健、社会情勢との関連、歴史
3	学校保健計画・・・学校教育目標との関連、保健室経営との関連
4	学校保健組織活動・・・学校保健関係者と各々の職務、学校保健組織と運営、関連組織
5	学校保健の対象・・・児童生徒の形態発育、機能発達
6	学校保健の対象・・・健康の基礎理論、実態
7	学校保健の対象・・・心の健康問題、精神保健
8	学校保健活動・・・健康管理：領域側面、意義、方法
9	学校保健活動・・・健康管理：健康観察、健康相談
10	学校保健活動・・・健康管理：健康診断、保健調査
11	学校保健活動・・・健康管理：感染症予防
12	学校保健活動・・・健康管理：学校環境衛生
13	学校保健活動・・・保健管理：学校安全と危機管理、救急処置
14	保健教育：学校における保健教育の考え方、保健学習、保健指導、学習指導要領
15	保健教育：性教育、薬物乱用防止教育、食育

【履修上の注意事項】

授業の最後に次の授業内容を予告するので毎時間の講義課題を明確にして、出席すること。授業の最後に振り返りのための課題を提示するので、それを踏まえて振り返りまとめておく。次の授業の最初に前回のまとめを提出する。

【評価方法】

レポート10%、試験90%で評価する

【テキスト】

学校保健ハンドブック 第5次改定 教員養成系大学保健協議会編 ぎょうせい
冊子 学校保健 松本敬子

【参考文献】

学校保健実務必携 第一法規

精神保健 I

担当教員 未定

配当年次 3年

単位区分 選択

開講時期 第1学期

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考 平成30年度から開講する

【授業のねらい】

- ・精神の健康についての基本的考え方と精神保健学の役割について説明できるようになる。
- ・精神保健を維持・増進するために機能している専門機関や関係職種の役割と連携について基礎的知識を備える。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	精神保健の概要（担当：茶屋道）
2	精神保健の歴史と現代における意義・課題（担当：茶屋道）
3	社会構造の変化と新しい健康観（担当：茶屋道）
4	ライフサイクルと精神の健康（出生前～思春期）（担当：吉光）
5	ライフサイクルと精神の健康（青年期～老年期）（担当：吉光）
6	ストレスと精神の健康（担当：吉光）
7	生活習慣と精神の健康（担当：吉光）
8	精神の健康、精神疾患、身体疾患に由来する障害（担当：吉光）
9	アルコール関連問題と精神保健（担当：茶屋道）
10	うつ病と自殺防止対策（担当：茶屋道）
11	現代社会を取り巻く諸相と精神保健（長寿・認知症・少子化を巡って）（担当：茶屋道）
12	精神の健康に関する心的態度（担当：茶屋道）
13	精神保健に関する予防の概念と対象（担当：茶屋道）
14	精神保健に関する国、都道府県、市町村、団体などの役割と連携（担当：茶屋道）
15	精神保健に関する専門職種（担当：茶屋道）

【履修上の注意事項】

- 1 必ず講義ノートを作成すること。また、配布するプリントをファイル化し毎回持参することが必要である（配布資料は何回か使用する可能性がある）。
- 2 授業前にテキストの該当部分を一読しておくこと。
- 3 授業後に配布された資料や講義ノート・テキスト等を用い振り返りを行いながら理解を深めること。

【評価方法】

- 1 試験による評価（70%）
- 2 授業中のレスポンスやミニレポート（30%）

【テキスト】

日本精神保健福祉士養成校協会＝編集『新・精神保健福祉士養成講座 第2巻 精神保健の課題と支援（第2版）』中央法規

【参考文献】

各講義ごとに主要文献を紹介する

健康相談論

担当教員 古賀 由紀子

配当年次 2年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 第2学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

主として学校保健の対象である児童生徒の発達発育の実態を理解し、健康問題の現状を捉える。そして対象者の活動の場の違いによる健康相談の方法を知り述べることができる。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	子どもの健康問題の実態 1. 発育発達の問題
2	子どもの健康問題の実態 2. 社会的視点からの健康問題
3	健康相談に関連する諸理論、健康相談のプロセス
4	健康相談の学校での実施者一養護教諭、担任、学校医の専門性や役割に応じた健康
5	学校外における子どもの活動の場を考える
6	活動の場の違いによる健康問題の違い
7	活動の場の違いによる担当者の違いと役割
8	活動の場の違いがいによる健康相談を考える
9	アセスメントの方法 1. フィジカルアセスメント、生活習慣的アセスメント
10	アセスメントの方法 2. 心理的アセスメント、社会的メンタアセスメント
11	諸問題の捉え方と具体的な対応について（事例研究の目的）
12	事例研究：疾病を中心とした事例
13	事例研究：心的背景をもつ不調の事例
14	事例研究：学校外のスポーツ活動での事例
15	疾病、心的背景をもつ事例のロールプレイ、健康相談における記録、力量形成・研究・研修

【履修上の注意事項】

授業の最後に次の授業内容を予告するので、その内容について調べておくこと。
授業の最後に振り返りのための課題を提示するので、それを踏まえて振り返りまとめる。

【評価方法】

レポート30%、まとめのテスト70%として評価する

【テキスト】

随時資料を準備する

【参考文献】

養護教諭の行う健康相談 東山書房

救急処置法

担当教員 平崎 和雄、井手 裕子、齋田 和孝

配当年次 1年

開講時期 第1学期

単位区分 選択

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

本講義では、生命に関わる緊急を要する救命処置、頭、頸部外傷のような重大事故の救急処置、またスポーツ現場での事故を予測し、事故が発生した際の正しい知識・技術を身につけ、あらかじめ事故発生時における救急処置の対応計画を備える重要性や実施者の心得、緊急性を判断するための的確な障害評価の方法、熱中症、過換気症候群など内科疾患における救急処置の基本的な留意点と適切な手順を自ら実践出来るようになる。また、スポーツ現場で備えておくべき救急処置用機材に関する知識と利用法についても実践・説明できるようになる。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	オリエンテーション (平崎・井手)
2	救急処置の基本的知識 (平崎・井手)
3	スポーツ現場における救急処置 (平崎・井手)
4	外傷時の救急処置 (R I C E処置、止血、テーピング) (平崎・井手)
5	外傷時の救急処置 (特殊な処置－理論) (齋田)
6	外傷時の救急処置 (特殊な処置－実技) (齋田・平崎・井手)
7	外傷時の救急処置 (患部固定法、運搬法) (平崎・井手)
8	緊急時の救命処置 (C P R理論) (齋田)
9	緊急時の救命処置 (C P R実技・基礎) (齋田・井手)
10	緊急時の救命処置 (C P R実技2・応用) (齋田・井手)
11	緊急時の救命処置 (A E D理論) (齋田)
12	緊急時の救命処置 (A E D実技) (齋田・井手)
13	内科的疾患の救急処置 (急性) (平崎・井手)
14	内科的疾患の救急処置 (慢性) (平崎・井手)
15	現場における救急体制 (平崎・井手)

【履修上の注意事項】

実習に際しては適した服装で受講するようにすること。

授業後に復習をしておくこと。

【評価方法】

受講態度30%、定期試験70%で判断し評価する

【テキスト】

公認アスレティックトレーナー専門科目テキスト 第8巻 財団法人日本体育協会

【参考文献】